

# ちょっと読んでみませんか(平成三十年春彼岸)

第45話『“完璧(かんぺき)”は良いこと?』(本源寺副住職 本間健司)

多くのメダル獲得や「カーリング女子」が話題となったピョンチャンオリンピックよりも、もう少し前、今年一月に行われました、卓球の全日本選手権のなかで、私にとって大変印象に残った場面がありました。

それは、女子シングルス決勝戦での一場面です。

前年優勝者の平野美宇選手と、静岡県出身の伊藤美誠選手が戦った決勝ですが、伊藤選手が第1、2セットを連取、そして迎えた第3セット。1セット十一点制のところ、伊藤選手が最初から10点を連続して取り、10対0でセットポイントを迎えました。

このセットもあっさりと取ってしまうんだろうな、と思って観ていると、解説者が次のように発言しました。

「次はリードしている伊藤選手のサーブですから、サーブをミスするかも知れませんね。」

私は、内心、「はっ?」と思いましたが、同様に感じたのであろう実況の方も、

「それはどうということでしょう?」  
と解説者に質問しました。

それに対して解説者は、次のように答えたのです。

「卓球の試合では、相手を0点に抑えてセットを取りそうな時は、わざと自分のサーブを外すことが良くあるんですよ。」と。

すると、解説者の言った通り、伊藤選手は自分のサーブを何のためらいもなく、あっさりとネットに詰まらせ、相手に得点が入りました。

しかし、このセットも伊藤選手が11対2で取り、結局、セットカウント三対一で、伊藤選手が初優勝を飾りました。

なぜ私にとって、その場面がとても印象に残ったかという点、その「あえて相手を0点に抑えない」ということに、二つの意味合いを感じ取ったからです。

一つめは、やはり、相手に「0点負け」という屈辱を負わせないことによって、相手のプライドを守ってあげること。つまり、対戦相手への「敬意」を示す行為であるという事です。

そして、もう一つは、「相手を0点(完璧)に抑えた!」という自信が、「過信」や「慢心」へとつながり、自分自身が平常心を失ってしまうことを避ける、という意味合いがあるのではないかなと、私は深く感じたのです。

古来、日本には、「魔が入る」ことを恐れて、あえて『**完璧を避ける**』という美学があるようですが、それと共通するものを感じました。

さて、『妙法蓮華経(みょうほうれんげきょう)』というお経の方便品(ほうべんぽん)

第二というお話の中に、「**五千人起去**」<sup>きこ</sup>という有名な一場面があります。

お釈迦様が、さあこれから『妙法蓮華経』という“永遠の真理”について説き始めようとしたその時、聴衆のなかの五千人あまりの者が、教えを聞かずに去っていったという場面です。

去っていった理由は、何だと思えますか？

難しそうだな…と感じて、聴くのをあきらめたからではないのです。それとは正反対。

「もう自分は、『**仏教の真理**』のことは知っているし、充分実践もしているから、聴くまでもないだろう」という「慢心」からだったのです。

「慢心」のために、「素直」に聞く耳を持たない者に教えを説いても無駄であることを見抜いていたお釈迦様は、この去っていく五千人を決して止めず、ただ後ろ姿を静かに見送りました。

(この五千人は、お釈迦様の臨滅前によく救われることになります。)

自分が優秀だとか、「完璧に」修行を積み重ねたんだ、という「**過信**」や「**慢心**」を捨てて、完璧でない自分自身の欠点や弱さをきちんと認める「**素直さ**」「**謙虚さ**」こそが、仏道修行にとって最も大切であるということを示した一場面でした。

今回のテーマ、「完璧は良いこと?」ですが、そもそも私たち人間にとって「完璧」なんてことはあり得ないはずですよ。

しかし、現実の社会を見ると、インターネットの問題や、また、店舗への苦情の増加に象徴されるように、ミスや欠点の許されない、「完全」「完璧」を求める社会風潮になっています。

もちろん、それが日本人、日本という国の長所でもあるのですが、かたや一方、日本には『**完璧を避ける**』という美学も伝統としてあったということも、また事実なんですよ。

自分の欠点、他人の欠点、社会の欠点をきちんと認められる「謙虚さ」・「素直さ」そして「心の余裕」こそが、実は、“完璧”なことよりも、かえって、風通しの良い生き生きとした雰囲気を生み出しているのではないのでしょうか。

卓球の伊藤選手が、伸び伸びと自然体で優勝までたどり着いたように。

お釈迦様 仏さまは、私たちの長所も欠点も、すべてお見通しなのですから…

**合掌 南無妙法蓮華経**